

<論 文>

通所施設見学において看護学生がもった老年者観の検討

紺谷 英司¹⁾，高岡 哲子¹⁾，深澤 圭子¹⁾，渡邊 朋枝²⁾

An examination of nursing students' outlook toward the elderly after having visited daycare centers for seniors

Eeiji KONNYA , Tetsuko TAKAOKA , Keiko FUKAZAWA ,
Tomoe WATANABE

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科, ²⁾ 元名寄市立大学保健福祉学部看護学科

The objective of this study is to illustrate nursing students' outlook toward the elderly after having visited adult daycare centers. The subjects were 38 students in the second year of a 4-year nursing college. Data was collected from reports on their perceptions of the elderly, written after visiting the adult daycare centers, and were analyzed using Berelson's method. From the results, five categories and 25 subcategories were derived. Among the categories, there was a high frequency of three positive items "They are active," "They show concern for others" and "They have rich facial expressions". It can be assumed that the positive nature of these categories resulted from the strong impact of seeing, with their own eyes, how energetically the elderly lived despite sickness or handicap. Another characteristic of the elderly that students were able to take notice of gave the category "There are physical differences between them". Therefore, it was suggested that introducing a visit to an adult daycare center as a part of the elderly nursing education program is an effective way of enriching students' perceptions of the elderly.

本研究の目的は、看護学生が直接老年者と触れ合う体験でもった老年者観を明らかにすることである。協力者は、4年制大学の看護学科2年生の38名である。データの分析は、通所施設見学後に提出された老年者観のレポートを、Berelson、B（1957）の内容分析の方法に基づいて行った。その結果、5つの「カテゴリー」と25の「サブカテゴリー」が抽出された。そこでは、「活発である」「気づかいができる」「表情豊かである」などポジティブな老年者観が多く抽出された。これは、通所施設見学で、病気や障がいを持ちながらも元気に生活している老年者を目の当たりにしたインパクトの強さが影響したものと考えられる。また、老年者の特徴である「個体差がある」ことに注目できていた。よって、老年看護学教育において、施設見学を導入することは豊かな老年者観を育成する際に効果的であることが示唆された。

キーワード：通所施設見学 老年者観 看護学生 老年看護学教育

I. 序論

わが国は世界有数の長寿国となり¹⁾、2000年には健康日本21が制定されるなど生命の延長だけではなく生命の質をも重視する「健康寿命」という考え方が提唱されるようになってきた²⁾。また、国民においても、加齢に伴う物忘れなどをポジティブに捉えた「老人力³⁾」がベストセラーになったり、日野原によって設立された「新老人の会⁴⁾」が注目されたりと、老年者の持っているパワーに注目する考え方

が広がりつつある。

老年看護学においても、老年者の健康や疾病・障がいの状態や程度がどうであれ、老年者自身が持っているパワー（生命力、英知、生きる技法など）を洞察し、自立への志向性を信頼し、支援することにおいて発想を転換する必要性が強調されている⁵⁾。つまり老年看護の実践者を育成するためには、老年者のポジティブな側面に着目し、老年者自身の持っている力を発揮してもらえるようなかわりができるように教授する必要がある。

しかし、高度経済成長期を境にした核家族化の進行により¹⁾ 老年者と生活した経験のある若者が減少してきていることが推測される。その上現代の学生は、全体的に社会経験が少なく生活体験に乏しいため、老年者に対してどのように接したらよいのか、老年者の行動をどのように理解したらよいのかわからず、苦手意識を持つ危険性もある。このような状況で、学生が入手しやすいマスコミなどで取り上げられる老年者の情報は、詐欺の被害者だったり、孤独な死を迎えていたりネガティブな内容が多い。これらのことから、清水ら⁶⁾が述べているように、学生が老年者に対して、マイナスイメージを持ちやすいことも十分にうなずける。以上の社会背景や先行研究を根拠に、老年看護学教育では偏った老年者観を現実の豊かなものに広げられるよう教授するために、老年者の話しを聞く機会を設けたり、施設見学を企画したり、老年者疑似体験を導入したりと、様々な取り組みがされている。

竹田ら⁷⁾は、高齢者疑似体験による高齢者理解の可能性と限界に関する研究を行ない、高齢者疑似体験、ふれあい援助実習、高齢者理解（講義）で、高齢者施設での臨地実習および講義の後に体験学習を実施したⅠ群と、実習および講義前に実施したⅡ群との比較を行った。その結果Ⅰ群は老いの追体験を課題として臨み、既習の知識と“今回の体験を統合して理解し”、Ⅱ群は「若い」の疑似体験によって“身体的な機能低下とそこから派生する思いを実感することで漠然としていた高齢者像がイメージできる”ようになっていたことを報告した。高岡ら⁸⁾は、老年看護学における看護学生の高齢者観の育成に関する研究で、学生には、“老年看護学の基本的な知識を習得した後に高齢者疑似体験や、通所施設見学を体験すると、高齢者観が広がり対象理解を深める多くの視点が養われる”と結論づけた。これらのことからわかるように、老年者観に関する教育は、実施内容だけではなく実施時期など、教育カリキュラム全体を検討する必要があるものと考えられる。

よって本研究は、何らかの病気や障害を持ちながらも、地域で元気に生活されている老年者と看護学生が出会う機会を活用して、直接老年者と触れ合う体験の中でもった学生の老年者観を明らかにし、老年看護学教育への提言を行なうことを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象

対象は4年制大学看護学科の2年生で、老年看護学概論で行われた通所施設見学に参加した45名のうち、承諾が得られた学生である。

2. 老年看護学に関するカリキュラム進捗と施設見学のプログラム内容

1) 老年看護学に関するカリキュラム進捗と概要

老年看護学に関するカリキュラムの進捗を表1に示す。老年看護学に関するプログラムは2学年後期から開始される。「老年看護学概論」の授業内容は表2に示したとおりで、主に老年者を理解するために必要な講義と、老年看護学で活用する看護モデルを理解するためのグループワークを行なう。老年看護学活動論Ⅰでは、主に同じ対象理解であっても、より具体的な「老年者の生活行為と看護援助」と「老年者特有の症状や検査・手術に対する看護」を中心に授業を行う。老年看護学活動論Ⅱでは、今まで学習したことを基盤として事例を用いた看護過程の展開を行い、実際に立案した看護計画を基に学生が患者役と看護師役に別れてシミュレーション学習を行う。老年看護学実習では病院や老人施設で、学生が1人の患者（入所者）を受け持たせていただき看護展開を行なう。

老年者観に関連した授業は全体を通して行われるが、主に老年看護学概論と老年看護学実習で実施される。

2) 施設見学プログラム

施設見学の実施要項を図1に示す。実施時期は、「地域高齢者の講話」を聞き、老年者の特性を理解するための講義が行われた後に計画する。見学させていただいた施設は、特別養護老人ホームを併設しデイサービスを行っている1施設と、老人保健施設を併設しデイケアを行っている1施設である。デイサービスの特性として、通所施設では健康チェックや機能訓練、入浴介助、生活相談などが行われていること、登録者は125名でその平均介護度は1.5、平均年齢は82歳であることなどがあげられる。この2施設へ、午後のレクリエーションやおやつの時間などの約3時間程度を活用して、学生25-26名に別れて見学する。図1に示したとおり、学生には目的に合わせた事前学習を課して、学習効果を向上させるための工夫をする。さらに見学後は、「施設見学での学びと、得た老年者観」について、A4用紙1枚程度のレポートを記載することを課題とする。

表1 老年看護学に関するカリキュラム進度

科目	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
老年看護学概論 (2単位)				
老年看護学活動論Ⅰ (2単位)				
老年看護学活動論Ⅱ (2単位)				
老年看護学実習 (4単位)				

表2 老年看護学概論履修内容

回数	履修主題	内容
1	老年看護の概念	
2	地域老年者の講和	グループワーク
3	老年者の特性の理解	身体面
4	老年者の特性の理解	心理的・社会的特性
5	老年者とのふれあい	施設見学：老年者と共に時間を過ごす
6	加齢過程による社会文化的影響	諸外国とわが国の老年者の動向
7	老年者の生活の場	老年者と家族を支える保健医療福祉者の各々の役割と機能
8	老年者を取りまく社会資源	
9	老年者を支える老年看護の課題	老年看護の役割と機能、他職種との協同と連携
10	老年看護と倫理	老年看護の課題と展望
11	看護理論とは何か RLT看護モデルの概要	老年看護学におけるローパーらのモデルの活用
12	RLT看護モデルの特徴	どのような経過でモデルが出来たのか、ローパーらが大切にしていることは何か ・ローパーらが捉える看護の主要概念
13	グループワーク (GW) 課題： ・RLT看護モデルの主要概念 GW	
14	GW	
15	GW	
16	GW	

(太字は特に老年者観に関連した授業である)

施設見学実施要項

1. 目的

- ・高齢者と直接接することで、高齢者観を深める。

2. 学習方法

《事前準備》

- ・施設見学のオリエンテーションを受ける。
- ・通所ケア施設に関する事前学習を行う。：施設の概要、就業している職種と人員、利用者の特徴など

《実施》

- ・見学時間内に行われている、ケア、レクリエーションなどの活動を見学する。
- ・高齢者と共に、レクリエーションなどに参加する。
- ・高齢者の方たちと直接お話をさせていただく。

《実施後》

- ・施設見学後の高齢者観についてレポートを提出する。
- ・施設見学での学びについてレポートを提出する。

3. 評価

- 1) 学生評価：レポートの内容により行う。
- 2) 学習評価：見学施設からのご意見、教員の意見、学生の反応、学生のレポートにより行う。

4. 学生の見学時の服装と注意点

- 1) 見学時の服装は各施設と検討し決定する。
- 2) ネームは必ずつける。(その際、字を大きくするなど、見やすいように工夫する。)
- 3) 貴重品は各自が管理するので、邪魔にならないように工夫する。
- 4) 施設内では職員の指示に従う。
- 5) 施設内では、すれちがった方すべてに挨拶をする。
- 6) 利用者に依頼されたことは必ず、職員に伝える。
- 7) 自分だけの判断で行動を起こさない。

図1 施設見学の実施要項

3. データ収集場所と期間

データ収集場所は北海道内にある4年制大学の看護学科で、データ収集期間は200X年11月である。

4. データ収集方法

- 1) 通所施設見学後、どのような老年者観をもったのかを記述してもらう。
- 2) 分析に用いる学生の基本属性は、性別、年齢、老年者との生活体験である。

5. データの分析方法

本研究は、学生のレポートから老年者観を明らかにすることを目的としている。つまり、レポートに何が記載されているのかを明らかにする必要がある。そこで文章を忠実に要約できるBerelson, B⁹⁾の内容分析の手法に基づいて行うことが妥当であると判断した。その段階は以下の通りである。

分析手順の参考例を表3に示す。

- ①「施設見学」レポートの文脈を整理し、素材とする。その素材には文脈ごとに便宜上、連続番号とIDをつける。
- ②素材から、「老年者観」に関する文脈を抽出し、データとする。
- ③抽出されたデータを文脈ごとに単位とする。
- ④文脈は意味内容の類似性に従い分類し、〈サブカテゴリー〉≪カテゴリー≫をそれぞれ抽出する。
- ⑤分類は、老年看護学教員4名で行う。
- ⑥抽出された老年者観を検討する。

表3 分析手順の参考例

No	ID	データ	文脈の整理	抽出の有無	一致/不一致	サブカテゴリー	カテゴリー
2	1・2	高齢者の方と一緒にレクリエーションしていると、一人ひとりが生き生きしているという印象を受けた。	高齢者の方と一緒にレクリエーションしていると、一人ひとりが生き生きしているという印象を受けた。	抽出	一致	生き生きしている	活発である
26	5・2	今日高齢者と接した中で感じたことは、さまざまな生活層の方がおられ、苦勞の中で生きてこられたというイメージを強く感じました。	今日高齢者と接した中で感じたことは、さまざまな生活層の方がおられ、苦勞の中で生きてこられたというイメージを強く感じました。	抽出	一致	個性のある1人1人である	個体差がある
35	7・1	今回の見学を通して抱いた高齢者に対するイメージは、誰もが穏やかで優しいわけではないということだ。	今回の見学を通して抱いた高齢者に対するイメージは、誰もが穏やかで優しいわけではないということだ。	抽出	一致	個性のある1人1人である	個体差がある
49	10・4	人生経験が豊富、	人生経験が豊富、	抽出	一致	経験から得た知恵がある	尊重できる存在である
7	2・2	精神的な熟練を感じた。	精神的な熟練を感じた。	抽出	不一致	精神的に熟練している	尊重できる存在である
118	29・5	楽しんでいるように思えた。	楽しんでいるように思えた。	抽出	一致	楽しそうである	表情豊かである
17	4・1	今回、施設見学に行ってきた、様々なことを学ぶことができた。私は高齢者という「元気がない」「弱々しい」というイメージを持っていた。	今までのイメージ	抽出せず	一致		
37	7・3	今回の見学では、あまり積極的に拒絶の態度を示す高齢者と関わりを持つことが出来なかつたので、次回は自分から接したいと思った。	自分の反省	抽出せず	一致		

6. 倫理的配慮

本研究は、学習内容の一部を使用することと、事前に承諾書をとらないことで研究協力者に与える心理的、身体的侵襲は極めて低いと考える。しかし、研究者の所属機関でデータ収集を行うため、研究協力を拒否することで、学習上何らかの不利益をこうむるのではないかと懸念することも予測できる。そのため、この研究への協力を断っても、成績やその他の評価には一切関係ないこと、また研究への協力を途中で辞退しても不利益をこうむらないこと、さらにデータは秘密保持のためIDをつけて匿名で処理し、研究目的以外では使用せず、研究終了後はすべて消去することを説明し、書面にて同意を得た。なお本研究は、学生が所属する大学の倫理委員会で承認を得た上で実施した。

Ⅲ. 結果

通所施設見学前の老年看護学概論の講義、及び施設見学に関するプログラムは予定通りに実施された。

1. 対象の特性

本研究の対象は、4年制大学看護学科の2年生で老年看護学概論を受講し、「通所施設見学」に参加した学生45名のうち、承諾が得られた38名であった。年齢は全員20歳代で、性別は女性が35名と男性が3名で

あった。現在は、通学のため1人暮らしをしている者が多かった。

以前、もしくは現在も継続して、祖父母との同居経験があるものは、49%と約半数が老年者との生活を経験していた。

2. 施設見学でもった老年者観

施設見学実施後に学生がもった老年者観を表4に示す。施設見学のレポートから得られた素材は151文脈であった。そのうち老年者観が記載されていた92文脈をデータとして扱った。この老年者観の内容分析の結果、5つの《カテゴリー》と25の〈サブカテゴリー〉が抽出された。以下、カテゴリーを《 》で、サブカテゴリーを〈 〉で、サブカテゴリー内に、文脈数を（ ）で示す。その後、特徴的な記述を「 」で示す。

《活発である》は、〈生き生きしている(5)〉〈意欲的である(3)〉〈元気である(16)〉〈自分の意見を主張できる(2)〉の4つのサブカテゴリーによって構成されていた。〈生き生きしている〉は「高齢者の方と一緒にレクリエーションしていると、一人ひとりが生き生きしているという印象を受けた」などから、〈意欲的である〉は「自分自身でやろうと意欲があることがわかりました」から、〈元気である〉は「元気なところは私たちとなんら変わらない、とイメージが大きく変わった」などから、〈自分の意見を主張できる〉は「実際に会ってお話させていただくと、自分の意見をしっかり持っていて、自分の意見をきちんと主張していたと感じた」などの記述から抽出された。

《気づかいはできる》は、〈相手を尊重する気持ちがある(6)〉〈やさしい(2)〉〈雰囲気作りができる(1)〉の3つのサブカテゴリーによって構成されていた。〈相手を尊重する気持ちがある〉は「私は、今回の施設見学を通して、高齢者は自分以外の人と接することをとても大切にしている」から、〈やさしい〉は「親しみやすく優しいという印象を持ちました」から、〈雰囲気作りができる〉は「高齢者の方々は、車椅子に乗っていたり、耳や目が悪くて行動は制限されていても、友達とおしゃべりをしたり、遊んだり、お菓子を食べたりといった何気ない行動だけで笑顔になれる環境、雰囲気を上手に作れる人たちだと思った」などの記述から抽出された。

《個体差がある》は、〈ADLが高い(4)〉〈美しくありたいと思う気持ちを持っている(1)〉〈押し付けがましい(1)〉〈頑固である(1)〉〈個人差が大きい(1)〉〈個性のある1人1人である(8)〉〈自分が思っていたよりも若々しい(4)〉〈純粋である(2)〉〈身体的衰退がある(2)〉〈話し好きである(2)〉〈深みがある(1)〉の11のサブカテゴリーによって構成されていた。〈ADLが高い〉は「一人でどこへでも行ける、というものでした」から、〈美しくありたいという気持ちを持っている〉は「歳をとっても、女性は『美しくありたい』という気持ちを持っているのだ、と感じた」から、〈押し付けがましい〉と〈頑固である〉は「今回の見学を通してイメージが変わることはなかった」ということから、〈個人差が大きい〉は「今回の施設見学で高齢者の方々と直接触れ合わせていただき、一口に高齢者といっても非常に個人差が大きいのだというイメージを抱いた。ADLの自立度や障がいの有無・程度が一人ひとり異なっており、レクリエーションの際にも、一人で行える方、職員さんに手を貸してもらおう方など多様性が目立っていた」から、〈個性のある1人1人である〉は「今日高齢者と接した中で感じたことは、さまざまな生活歴の方がおられ、苦勞の中で生きてこられたというイメージを強く感じた」などから、〈自分が思っていたよりも若々しい〉は「いくつになっても若さを忘れていない」などから、〈純粋である〉は「話しかけたときに照れくさそうにしていたおじいちゃんがいたのですが、純粋だという印象も受けました」などから、〈身体的衰退がある〉は「健康面では私たちより、強くないかもしれない」などから、〈話し好きである〉は「話し好きというイメージが変わった」などから、〈深みがある〉は「高齢者に対するイメージは深みがある」などの記述から抽出された。

《尊重できる存在である》は、〈経験から得た知恵がある(12)〉〈精神的に熟練している(1)〉〈大切な存在である(2)〉の3つのサブカテゴリーによって構成されていた。〈経験から得た知恵がある〉は「話をしたときには、私が知らないすごく多くのことを教えてくれて、やはり高齢者の方は知識

が豊富であると改めて思いました」などから、＜精神的に熟練している＞は「精神的な熟練を感じた」から、＜大切な存在である＞は「人生の先輩である高齢者に対し、このような表現は適切でないかもしれないが、決して見下しているというという意味ではなく、体の自由がちょっとずつ利かなくなった高齢者を率直に守りたい、大事にしたいと感じた」などの記述から抽出された。

《表情豊かである》は、＜明るい（5）＞＜笑顔である（4）＞＜感情を隠さない（2）＞＜楽しそうである（4）＞の4つのサブカテゴリによって構成されていた。＜明るい＞は「もちろん年齢や病気、要介護度に差があるので全員とはいえませんが、自分が思い描いていたよりずっと明るく」などから、＜笑顔である＞は「何よりもとても温かい笑顔を持っている人たちだと思った」などから、＜感情を隠さない＞は「自分の話を聞いて欲しい欲求が強かったり、自分が嫌いだと思ったことはしない・・・など、感情を隠さずに出している人が多いと感じました」などから、＜楽しそうである＞は「大変嬉しそうにしていた様子があった」などの記述から抽出された。

このように、主にポジティブな側面に着目されていた。その中で、《個性差がある》に含まれていた＜頑固である＞＜身体的衰退がある＞のように、わずかであるがネガティブなイメージも抽出されていた。

表4 施設見学後に学生がもった老年者観

カテゴリー	サブカテゴリ	文脈数	
活発である	生き生きしている	5	
	意欲的である	3	
	元気である	16	
	自分の意見を主張できる	2	
気づかいができる	相手を尊重する気持がある	6	
	やさしい	2	
	雰囲気作りができる	1	
個性差がある	ADLが高い	4	
	美しくありたいと思う気持を持っている	1	
	押しつけがましい	1	
	頑固である	1	
	個人差が大きい	1	
	個性のある1人1人である	8	
	自分が思っていたよりも若々しい	4	
	純粹である	2	
	身体的衰退がある	2	
	話好きである	2	
	深みがある	1	
	尊重できる存在である	経験から得た知恵がある	12
		精神的に熟練している	1
大切な存在である		2	
表情豊かである	明るい	5	
	笑顔である	4	
	感情を隠さない	2	
	楽しそうである	4	

IV. 考察

1. 本対象の老年者観の特徴

1) ポジティブな老年者観

《活発である》《気づかいができる》《尊重できる存在である》《表情豊かである》など、比較的ポジティブな老年者観が多く抽出された。これは、元々老年者との生活体験がある者が多いことと、通所施設見学で、病気や障がいを持ちながらも元気に生活している老年者を目の当たりにしたインパクトの強さが影響したものと考えられる。この施設見学で協力者は、ただ単に老年者とお話させていただきだけではなく、実際に風船バレーなどのゲームを行った。これらの経験から、弱い存在だと思っていた老年者が私たちとあまり変わらないということを実感していた。《活発である》の＜生き生きしている＞や＜元気である＞などのサブカテゴリーは、これらの経験が影響していることもうかがえる。デイケアやデイサービスで行われているレクリエーションは、健康障がいや生活障がいがあってもできるように工夫されているため、自宅では活動することが少ない老年者も参加しやすい。また、施設では多くのプログラムを取り入れているため、老年者の個性にあったレクリエーションが選択しやすい。このような条件が整っているからこそ、協力者は生き生きとした老年者の姿に出会うことができたものと考えられる。このように環境を整えることで老年者の本来持っている力が発揮され、生活の質が向上することを意識づけて教授することが必要であると考えられる。

2) 個体差がある老年者観

《活発である》に含まれた＜自分の意見を主張できる＞にもみられるように、本研究においては老年者の個体差に着目した老年者観が多く見られた。これは、老年者の特徴として、個体差があることを強調して教授したことが影響したものと考えられる。そのため、ポジティブな老年者観を持ちながらも、＜身体的衰退がある＞や＜頑固である＞を含む《個体差がある》ことに着目できていたものと考えられる。《個体差がある》は、他のカテゴリーと比較してサブカテゴリー数が多く抽出されていた。このように多様な老年者観がみられることは、老年者を理解するための視点を多く持つことにつながる。しかし、すべての協力者から多様な老年者観がみられたわけではない。よって、一人一人がもった老年者観を学生が共有できる場を提供することで、個々人の老年者観が広がるものと推測する。

2. カリキュラムへの提言

1) ディスカッションの導入

方法で記したように、今回は課題レポートを記したのみであった。前述したように、多様な老年者観は多くの協力者から得られたものである。体験学習にとって最も大切なことは“気づき”であると犬塚は述べている¹⁰⁾。また、清水ら⁶⁾は“体験を強化するためには体験学習直後の討論時間が必要”であり、教師は学生が振り返りを行い、“体験のプロセスを見なおして、その場で生じたことやその意味を考えられるようにかかわることが大切である”と述べている。つまり、体験終了後にディスカッションすることが、他者との気づきの共有や自らの気づきの強化につながるものと考えられる。よって、施設見学後のそれぞれがもった老年者観についてディスカッションする場を提供できるような授業の組み立てを行うことが重要である。

2) 老年期の理解

《個体差がある》に、＜押しつけがましい＞と＜頑固である＞とのネガティブな老年者観が含まれてはいたが、全体的にはポジティブな老年者観が多くみられていた。「序論」でも述べたようにネガティブに傾きやすいと言われている若者の老年者観において、これだけポジティブな老年者観が示されると、今後の実習などで虚弱な老年者に接する際に、過度の期待や自立を強いる看護を提供してしまうことになりかねないことが予想される。しかし、本研究の協力者は、老年者の個体差に着目することができていた。今後の老年看護学講義や実習においても、老年者に個体差があることを強調して教授し、老年者を個別に見る視点を整理、統合できるように支援していく必要もあると考えられる。

3) 実施時期

先に述べたように、施設見学は老年者の講話を聞き、老年者の特性を学んだ後にセッティングをした。そのため協力者は、ある程度老年者に対する知識をもった状態で施設見学に臨んでいる。これらのことから学生は、元気な老年者との比較を行うことや施設見学での経験を知識と照らし合わせることで、老年者理解がスムーズに行えたものとする。よって、実施時期としては妥当であったと考える。また今回は、「老年者の生活の場」や「老年者をとりまく社会資源」が終了していなかったため事前学習課題を提示した。これは、事前学習したことを後で確認することができるため、より興味深く講義を聞くことにつながったのではないかと考える。しかし、この点においては確認していないため、今後の課題としたい。さらに、成田ら¹¹⁾は「体験学習」の“効果が持続していない”ことを指摘している。つまり、今回得られた老年者観を持続するためには、何らかの方策が必要となる。老年看護学活動論Ⅱでは、学生が立案した看護計画に基づいてシミュレーション学習を導入している。そのため、施設見学での経験とシミュレーション学習を結びつけられるような方向づけを行うことで、効果の持続を期待したいと考える。

これらの効果においても、今後明らかにする必要があると考える。

V. まとめ

- ・ 本研究の結果から、《活発である》《気づきができる》《個性がある》《尊重できる存在である》《表情豊かである》の5つのカテゴリーと25のサブカテゴリーが抽出された。
- ・ サブカテゴリー<頑固である>や<身体的衰退がある>のように、ネガティブなイメージはわずかで、ポジティブな老年者観が多くみられた。
- ・ サブカテゴリー数が他のカテゴリーより多い《個性がある》に示されたように、個性に着目することができていた。
- ・ 見学後、協力者は多様な気づきを持つことになるため、その気づきを相互に共有したり、自らの気づきを強化したりするためにも、見学後にディスカッションを導入する必要性がある。
- ・ 老年者の理解が深まった時点で施設見学を組み立てると、豊かな老年者観の育成に効果があることが示唆された。

本研究は、第34回日本看護研究学会で発表した研究を論文としてまとめた。

文献

- 1) 厚生統計協会；国民衛生の動向、50 (9)、2003
- 2) 厚生省；厚生白書（平成12年版）新しい高齢者像を求めて—21世紀の高齢社会を迎えるにあたって—ぎょうせい、2000
- 3) 赤瀬川原平；老人力、筑摩書房、1999
- 4) 日野原重明；「新老人」を生きる - 知恵と身体情報を後世に遺す - 光文社、2001
- 5) 中島紀恵子；系統看護学講座 専門20 老年看護学 医学書院 2006
- 6) 清水初子・水戸美津子・流石ゆり子；老年看護学における教育方法としての体験学習 - 「高齢者擬似体験」学習に関する文献分析から -、山梨県立看護大学紀要、2 (1)、2000
- 7) 竹田恵子・兼光洋子・太湯好子；高齢者擬似体験による高齢者理解の可能性と限界—実施時期による学習効果の違い—川崎医療福祉学会誌、11、65-73、2001
- 8) 高岡哲子・服部ユカリ；老年看護学における看護学生の高齢者観の育成 - 教育プログラムへの提言 - 旭川医科大学研究フォーラム7 (1)、23-34、2006
- 9) Berelson. B (稲葉三千男他訳)；内容分析、みすず書房、1957
- 10) 犬塚久美子；わかる授業を作る看護技術教育3シミュレーション・体験学習、133-144、医学書院、東京、2000
- 11) 成田 伸・石井トク；特集 体験学習 [排泄] への疑問 授業研究「体験学習」の文献的考察、看護教育、(2)、91-100、1993